

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。）

朝ご飯をすませると、ママはひとあし先に、お仕事に出かけた。

わたしはというと、引き受けたお皿洗いとゴミ出しのお手伝いを終わらせ、ふだんより少し遅く学校へと出かけた。

正門を抜けて、玄関についたときには、先に登校した子たちの声が響いていた。

上履きに履き替え、廊下へと足を踏みだしたときだった。

「あっ！」

わたしは、目の前を通り過ぎていたサト先生にあやうく衝突しそうになった。

「あ、ごめんね、佐々野さん。大丈夫だった？」

先生は両手にたくさん荷物をかかえていた。おまけに、肩に重そうなバッグをさげていたので、わたし以上にふらついてしまっていた。

どうしたんだろう？ サト先生、すごく疲れた顔してる……。

顔色も悪かったし、目もとろんとしている。いつも元気いっぱいなのサト先生なのにめずらしいなあと思った。

そのときわたしは、先生の左袖になにかがこびりついているのに気づいた。

「先生……なにか、ついてます……。」

手を伸ばし、指でつまみとった。ねばっこくてどろりとしていた。

つまみとった指先がべたべたして、わたしは引っぱりだしたハンカチでふきとった。

「ありがとね。先生、ぜんぜん気づかなかった。」

「あの……どこで……？」

尋ねずにはいられなかった。だって、気になってしまったから。

「えっと、どこだったっけかなあ……。」

先生は、困ったように苦笑いをうかべた。なにかをごまかそうとするみたい……。

どうして？ 服についていた、ただの汚れなのに……。

「おっと。先生、行かなきゃ。じゃあ、あとでね。」

壁の時計をちらりと見たかと思うと、先生は急いで歩き去った。あんまり早足だったので、転ぶんじゃないかと心配したくらいだ。

「大学ではね、バドミントン部だったの。だから、運動はお手のものよ。」

そうサト先生はみんなに自慢していた。

でも、体育のボール運動では突き指をしたし、マット運動では思いっきり尻もちをついていた。たぶん運動は得意じゃないのかも……。

そういえばサト先生、ピアノもあまり得意じゃないと思う。音楽の授業では、パソコンを使って伴奏の音楽を流すことが多かったから……。

そう。サト先生がいちばん得意なのはたぶんパソコンだ。

社会の時間に、パソコンと大型テレビをつないで、びっくりするくらいにきれいなスライドショーを見せられた。

音楽もいっしょに流れてて、まるで映画みたいだった。いつも文句ばかりいう男の子たちも黙ったままじっと見入っていたし、

「やべえ、おれ、マジ感動した！」

口の悪い岸本くんさえも、そんなことをいつていた。

② わたしはサト先生のことを大好きだった。

ちよつと短気で、強引で、クラスの子がいたずらをしたときなんかは、遠慮せずにとことん叱りつける。きつといつも一生懸命なんだと思う。

なんとなく親戚のお姉さんっぽくて、先生を見ているといつも元気が出た。うちのクラスの担任の先生がサト先生で本当によかった……。

わたしはいつもそう思っていた。

一時間目の授業から、サト先生の様子はやっぱり変だった。

国語の時間だったけど、開くようにいつた教科書のページが違っていたし、黒板に書いた漢字の筆順も間違っていた。

岸本くんや戸田くんが調子に乗ってはやしたてたけど、先生は眉間にしわをよせただけで、注意しようともしなかった。

③ 「なんだよ、もー。」

岸本くんがぶつぶつと文句をいつた。肩すかしをくつたみたいだった。

先生、どうしたんだろう？ もしかして、あれと関係があるのかも……？

中休み。わたしはハンカチをポケットから取りだし、そつと机の上に置いた。

先生の服の袖からつまみとつた汚れが、白いハンカチにまだこびりついている。

顔を近づけてみた。

あのかきは泥水がついたのかなと思つていつたけど、今見るとなにか違ふ。泥にしては緑っぽいものがまじつているし、なんだか変なにおいもする。

なんなんだろう、これ……？

はつと顔をあげると、すぐそばに広瀬くんが立つていて、こつちを見下ろしている。

「え……な、なに……？」

びっくりして、わたしはそんなことをいつていた。

よく考えれば、広瀬くんの席はわたしの近くだったし、立ちあがつて、たまたまこつちを向いただけなのかもしれない。

わたしの声に、広瀬くんはちよつと驚いたようだった。

④ 困つたような表情をうかべると、

「それつて、苔っぽいよね。」

そう、ぼそりといつた。

「え……あ、あの……。」

あわてて問い返そうとしたけど、もう遅かつた。

「おい。サッカーやるから、おまえも来いつて。」

岸本くんたちがやつてきたかと思うと、広瀬くんを強引に引っぱつていつたからだ。

ちょっと困った表情をうかべていたけど、それでも広瀬くんはみんなといっしょに外へと出ていった。きつと、少しずつクラスになじんできているのだろう。

苔こけっばいよね……。

広瀬くんのいったことばだった。そのことばがわたしの頭のなかをぐるぐると回っていた。

確かにこれは、植物の苔こけなのかもしれない。最初は泥水どろみずだと思っていたけど、水分が蒸発して、苔の緑色が表面に出てきたのかもしれない。

もしこれが苔だとしたら……。サト先生はいついどこで服につけたんだろう？

疑問はたくさんあった。でも、いっぺんに考えるよりも、ひとつひとつ順番に考えていくほうがいい。わたしのおばあちゃんが、いつもいつていることだ。

⑤ 近道をさがすより、遠回りの道を一步一步踏みしめながら進むほうがいい。そのほうが、結局、自分の行きたい場所に早くたどりつけるって……。

最近、教室でみんなが話していたことを、一生懸命に思いだしてみた。

サト先生のこと、みんなはどんなことを話していたっけ……。

そういえば……。

先週だったと思う。朝、教室にやってきた男の子たちが騒いでいたことがあった。

「サト先生さ、なんかカメラマンみたいだったぜ。三脚さんきやくとデジカメかかえて歩いているんだから。」

「なに撮とってたわけ？」

「さあ。メタセコイアにやってくるカラスかなんかじゃないか？ 知ってるか？ あそこのでっぺんあたりに巣があるんだぜ……。」

確か、そんなことを話していた。

三脚とカメラ。それにメタセコイアとカラス。なんだか、つながりのないキーワードばかり……。

少しがっかりしたけど、わたしはそれでもまだしつこく考え続けた。

え？ もしかしてこういうこと……？

そして、ようやくあることを思いついたのは、ちょうど給食を食べ終わったときだった。

「ねえ、香菜かみなちゃん。遊びに行かない？」

昼休みに真理子ちゃんが誘さそってくれたけど、

⑥ 「ごめん……あの、用事が……。」

そういつて断ことわってしまった。

たぶん、わたしが誘いを断ったのははじめてなんだと思う。真理子ちゃんが、驚おどろいたようにわたしを見ていたから……。

でも仕方なかった。昼休みの間にどうしても確かめたいことがあったから。

昼休みの運動場は、天気がいいこともあって、

A 砂すなほこりがたつくくらいに、みんなは遊び回っていた。服が汚きたれてもまったく気にしていないみたい。それに比べて、先生の服の汚れを気にしている自分って

いったい……。

ふとそう思ったけど、やっぱり気になるものは気になる。そうになったら放っておけないというのは、きつとおばあちゃんゆずりの性格なんだろうなあと思った。

サト先生が服を汚した場所については、もう見当がついていた。

メタセコイアとカラスというのが大きなヒントだった。

この学校のなかにはメタセコイアの木があちこちで枝葉を広げている。でも、そんなメタセコイアのなかで、カラスがいるところといったらひとつしかない。

体育館の裏手にある小運動場だ。

そこは、芝生がしきつめられた緑の広場みたいところで、低学年の体育なんかよくそこでやっている。小運動場といっても、相当に広い。そこで、もうひとつのヒントを思いだした。

そう。広瀬くんのひとつが、わたしにひらめきをくれた。

サト先生の袖についていたあの汚れ。あれは、水分がたっぷりとついた苔だった。

水分がたっぷりとあつて、苔が生息している場所っていったいどこ？ しかも小運動場の近くで……。だったらもう、あそこしかない。

⑦ 小運動場の奥にあるビオトープだ。

低学年のときには生活科でよく行ったけど、最近行ったことがなかった。

大きな台風が来たときに、めちゃくちゃに荒れてしまったらしくて、それ以来、授業で見に行くこともなくなってしまった。

ただ、その場所には小さな水の流れがあつて、たくさんの草木が生い茂っていた。

ビオトープというのは自然が自然のままにある場所だから、どこかに緑の苔は必ず自生しているはずだった。

運動場で遊ぶみんなの視線を避けながら、わたしはビオトープへと向かった。

小運動場の奥にある通路を抜けると、すぐそこにひょうたん形の敷地が広がっている。そこがわたしたちの学校のビオトープだった。

あれ……なんだか前とは違う……。

⑧ その場所は、以前見たときと様子が変わっていた。

あのころは B した藪みたいだったのに、今見ると、地面の下草はいい感じに刈りこまれていたし、

崩れかけていた小道もしっかりと固められていて、道順を示す標識まで取りつけられていた。小道を進んでいくと、すぐにわかった。

水の流れの近くに、サッカーボールくらいの大きさの石がいくつかあつて、その石の表面には緑色の苔がびっしりとこびりついている。

きっと、ここにサト先生は来てたんだ……。

そう思った。でも、ここで先生はいったいなにしてたんだろう。

足もとを見て、はっと気がついた。

やわらかな土。まるでいいねいに耕された畑みたいだった。

そして、土の表面のあちこちから、名前はわからないけど、植物の芽がいくつも顔を出していた。

発芽……。

急にそのことばが、頭のなかに C うかんだ。そして、今日の授業の時間割りのことを思いだした。

これからある午後の授業といえは……。

⑨ いろんなことが、ひとつひとつ、頭のなかでつながっていった。

地面のすみに一定の間隔であいている三つの小さな穴を見つけた。

「ああ、そういうことなんだ……。わかった。きっと、そうだ。」

わたしは縁に囲まれたビオトープのまんなかで、そうつぶやいていた。

五時間目の理科の授業が始まる少し前に、わたしは教室にもどった。

もうサト先生は教室に来ていた。^⑩先生の様子を目にしただけで、自分の考えが間違っ^{まちが}ていなかったことがすぐにわかった。

だって、サト先生は、いつも以上に黒板をていねいにふいていたし、服装だって午前中とは違っていた。いつもはラフなジャージ姿なのに、今着ているのは、すごくまじめそうな紺色^{こんいろ}のスーツだ。

クラスの人々も、なんか変だなあって感じて、先生のほうをちらちらと見ている。

それでもまだ席につかずにおしゃべりしているところを見ると、^⑪もうすぐこの教室ではじまることには気づいていないようだった。

わたしはすぐに席についた。ぜったいに間違いないと思う。

あと、ほんの少ししたら、この教室に先生たちがたくさんやってくるはずだ。

だって、今からこの教室で、サト先生の研究授業が始まるのだから……。

そっと教室の後ろを見た。

そのとたん、扉^{とびら}ががらりと開き、何人もの先生たちが次々となかに入ってきた。

隣のクラスの平村先生もいたし、六年生の古賀先生もいた。四年生の山下先生も来てくれていて、妊娠中^{にんしん}の大きなおなかをさすりながら、みんなを見回している。そして、もちろん教頭先生の姿も……。

先生たちは、手に手にプリントをはさんだバインダーを持っている。片手にペンをかまえ、さっそくなにかを書きこんでいる先生もいた。

「げっ、研究授業じゃん。」

「マジで！」

男の子たちがさっそく騒^{さわ}ぎはじめた。

「静かにしなさい。先生たちがみんなの授業を見に来てくれたんだから。」

サト先生はそう注意した。でも声がうわずっている。

緊張^{きんちょう}してるんだ……。

ふいにサト先生が四月にいったことを思いだした。

「先生ね、今年、先生になって五年目なの。だからね、いろいろあるのよねえ。先生たちに授業見てもらったり、いろいろ研修を受けたり……。」

あー、どうしてもっと早く、あのときのサト先生のことを思いださなかったんだろう……。

そうしたら、今朝、大荷物を持ち、忙^{いそ}しそうにしていた先生に、

「がんばって！」

そう声をかけることができたかもしれないのに……。

朝からずっと緊張していたから先生は、午前中の授業でミスばかりしていたんだ。

サト先生は、授業のはじまりのあいさつをしたあと、

「さあ、今日はこのことについて勉強します……。」

⑫ そう仰々^{ようよう}しくいうと、黒板に《発芽》と書かれたカードを貼^はりつけた。

そうか、やっぱり発芽なんだ……。

発芽について勉強するのは、今日でもう三回目だった。

それなのに戸田くんは、

「えー？ はつめてなにさ？」

と、声をあげた。そしてその後ろの小松くんは、

「マジ、難しいんですけど！」

悪ふざけするみたいに大きな声でいった。心配したのか、教頭先生がゴホンとせきばらいをした。でも、男の子たちは気にもとめようとしな

が。んばってサト先生！

わたしは心のなかで声援を送った。

「仕方ないわねえ……。」

そう答えるサト先生の声はさつきより落ち着いていた。ようやく緊張を乗り越えたみたいだった。

「じゃあ、みんなにはテレビの映像を見てもらおうかな。」

そういうとサト先生は、大型テレビにかかっていた布をさつと取った。

すでにその画面にはなにかが映っていた。それはサト先生が机の上に置いているノートパソコンの映像だった。

やった。これで、きつとうまくいく！

その瞬間、わたしは確信した。

サト先生はパソコンが得意だった。それに、今までいっぱい準備をしてきたはずだったから。

ビオトープのやわらかい地面にあった、あの三つの穴……。

あれは、きつと三脚のあとだ。

その三脚にサト先生はデジカメを取りつけ、どのくらいの期間をかけたのかはわからないけど、植物の芽が土から出てきて、育っていくシーンを撮り続けたのだと思う。

じめじめした苔や泥で服を汚しながらも、それでもサト先生はもちまえのがんばり精神でビオトープに通信続けたのだらう。

だったら、きつと大丈夫だ。だってサト先生なら、みんながあつと驚くようなものを、ぜつたいにつくりあげているはずだったから。

「見ててね。これが発芽の様子よ……。」

テンポのいい軽やかな音楽が流れだしたかと思うと、テレビの画面いっぱいに鮮やかな映像が映しだされた。

たくさん写真を使った、素敵なスライドショーだった。

しだいに盛りあがっていく地面。植物の芽らしき緑が、少しだけ見える。

それでも、なかなか土のなかから顔を出すことができない。

でも、ちよつとずつちよつとずつ土を押しつけていく。ゆっくりと。けつしてあきらめることなく、一生懸命に……。

そしてついに、つややかな色をした力強い芽が姿を見せる。輝く太陽の光を一身に受けている。

感動したのは、わたしだけじゃなかった。

「マジ、すげーじゃん！」

「がんばれ、発芽！」

小松くんと戸田くんが大きな声援をあげた。しかも、真顔で。

そのあと、クラスみんなはわたしがいうのもなんだけど、今までにないくらいに集中して授業を受けていた。

みんなたくさん発表をしたし、サト先生もちよつとことばにつまることはあつたけど、わかりやすく授業を進めていった。

見ると、教頭先生が満足そうにうなずいている。

きつと、いい授業になってるのだろう。わたしもうれしさがこみあげてきた。

授業が終わりに近づいたころだった。サト先生がみんなに問いかけた。

これって、たぶん、次の授業に続く大事な質問なんだと思う。

「この学校にはね、じつは植物がとっても育ちやすい場所があるの。少しじめじめしてるけど、とっても暖かい場所なの……。さあ、どこだかわかる人？」

サト先生の聞き方が悪かったのか、みんなの発言はぴたりと止まってしまった。そつと見回すと、どの子も D した顔をしている。

これって、まずい……。

先生はきつと、あの場所のことを、誰かに発表してもらいたいのだろう。

どうしよう……。それなのに、誰も気づいていない。

^⑬ 手をあげて、わたしが発表すればいい。それはよくわかっていた。でも……。

教室のなかには先生たちがたくさん来ている。そして、みんなの様子を真剣な表情で見守っている。こんな場面で、わたしはちゃんと話せるだろうか……。

途中でことばがつまってしまいかもしれない。なにも話せなくなってしまうかもしれない。

そんなことを考えだすと、なんとかしなきゃという自分の勇気が、あつというまにしばんでいくみたいだった。

サト先生が困った顔でみんなを見ている。

だめ。このままじゃ、せっかくの授業が台なしになっちゃう……。

わたしは大きく息をすった。

「はい。」

低い声が聞こえたのはそのときだった。はつとして声のほうを見ると、手をあげた広瀬くんが立ちあがろうとしていた。

「X じゃないですか？ まだ行ったことはないけど、この学校にもあるって聞いたし……。前の学校じゃ、X にいろんな植物が育ってました……。」

大きくサト先生がうなずいた。うれしくてたまらないという表情だった。

「X そうだね。X があるよね。」

そして、まるで重大発表をするようにみんなに語りかけた。

「じつはね、この学校の X、世話をする人がいなくて、すごくあれてたの。それで先生ね、教頭先生やほかの先生たちといっしょに、少しずつきれいにしてきたの……。」

やっぱり。だから、あんなに居心地のいい場所になってたんだ。サト先生はいつものちよつと大げさな口調でさらに続けた。

「ここでみんなに提案があるの……。みんなにも手伝ってほしいんだ。Xの整備。みんなで協力してさ、もつときれいにしてみない？ そしたら、もつとたくさんの発芽が見られると思うんだけどな……。」

みんなは素直すなおにうなずいている。

「いいんじゃないね。おれ、あそこ好きだったから。」

岸本くんが、めずらしくふざけることなしにいった。

「賛成、わたしもあそこ好き！」

ひかりちゃんがかわいらしい声をあげた。

「いいと思います。」

「ぜったい、やるべしだよ！」

こういうことが大好きなみんなは、さっそく盛りあがりだした。

「では、次の理科の時間は、Xに集合ということにするわね。」

みんなはもう夢中になっていた。いろんな意見がとびかい、いつもの十倍はおもしろい授業になった。

そう。サト先生の研究授業はきつと大成功だったと思う。

よかった。本当によかったと心から思った。そしてわたしは、このクラスのことを、みんなのことがさらに大好きになった。

(福田隆浩たかひろ『香奈かなとなつの秘密』より)

問一 ― 線①「ひとあし先に」とありますが、意味に注意して「ひとあし」を漢字二字で表しなさい。

問二 ― 線②「わたしはサト先生のこと大好きだった。」とありますが、「わたし」は「サト先生」のことをどのような先生だと考えていますか。次のア―エの中からあてはまらないものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 気が短くて、強引^{ごういん}なところがあるが、いつも一生懸命^{いっしょうけんめい}な先生。
イ 親戚^{しんせき}のお姉さんっぽくて、見ているといつも元気が出る先生。
ウ 美しいスライドショーを作れるほどパソコンの得意な先生。
エ 大学ではバドミントン部だったほど、運動の得意な先生。

問三 ― 線③「岸本くんがぶつぶつと文句をいった。」とありますが、「岸本くん」はなぜ「文句をいった」と考えられますか。次のア―エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 先生が教科書のページや漢字の筆順を間違^{まちが}えたのにも関わらず、本気であやまらなかったことが納得できなかったから。
イ 先生がおこって注意してくるだろうと思っていたのに、予想していたような反応が無くて、つまらなかったから。
ウ 先生が自分が間違えたのにも関わらず、眉間^{みけん}にしわをよせておこったことが気に入らなかったから。
エ 先生がふざけている「戸田くん」を注意してくれるだろうと期待していたのに、何も言わずにだまってしまったことが嫌^{いや}だったから。

問四 ― 線④「それって、苔^{こけ}っぽいよね。」とありますが、「それ」とは何を指しますか。文中から十五字前後でぬき出して答えなさい。

問五 ― 線⑤「近道をさがすより、遠回りの道を一步一步踏みしめながら進むほうがいい。そのほうが、結局、自分の行きたい場所に早くたどりつける」とありますが、これに似た意味のことわざを考えて答えなさい。

問六 ― 線⑥「『ごめん……あの、用事が……。』そういつて断ってしまった。」とありますが、「わたし」が誘いを「そういつて断つ」たのはなぜだと考えられますか。次のア―エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 先生が服を汚^{きた}した場所はわかっていたが、友達にはそれをけっして知られたくなかったから。
イ 先生が服を汚してしまった場所が、体育館の裏手にある小運動場^{ちやうど}に違いないと確信したから。
ウ 昼休みの間に、先生がなぜ服を汚してしまったのかを一人でじっくりと考えたかったから。
エ 昼休みの間に、先生が服を汚した場所が推測通りの場所なのかどうかを確かめたかったから。

問七 文中の A、Dにあてはまる言葉として適当なものを次のア、エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

ア きよとんと イ もうもうと ウ ポンと エ うっそうと

問八 — 線⑦「小運動場の奥にあるビオトープだ。」とありますが、「ビオトープ」とはどのような場所のことをいうのですか。文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

問九 — 線⑧「その場所は、以前見たときと様子が変わっていた。」とありますが、「その場所」の様子はどのように変わっていたのですか。次のア、エの中からあてはまらないものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 地面の下草がいい感じに刈りこまれていた。
イ 明るい日ざしもあちこちに届いていた。
ウ ひょうたん形の敷地になっていた。
エ 道順を示す標識が取りつけられていた。

問十 — 線⑨「地面のすみにくきつと、そうだ。」とありますが、「三つの小さな穴」とは何のあとだと「わたし」は推測したと考えられますか。この後の文中からぬき出して答えなさい。

問十一 — 線⑩「先生の様子を目にただけで、自分の考えが間違っていたことがすぐにわかった。」とありますが、先生はどのような様子だったのですか。できるだけ具体的に、文中の言葉を使って二点に分けて答えなさい。（それぞれ二十字以内で答えること。）

問十二 — 線⑪「もうすぐこの教室ではじまることには気づいていないようだった。」とありますが、「この教室」では何がはじまるのですか。文中からぬき出して答えなさい。

問十三 — 線⑫「仰々しく」の意味として最も適当なものを次のア、エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア いつもより緊張した様子で
イ 大きな声で、元気よく
ウ わざとらしく、おおげさに
エ 細かく、ていねいに

問十四 — 線⑬「手をあげて、わたしが発表すればいい。それはよくわかっていた。でも……。」とありますが、なぜ「わたし」は手をあげなかったのですか。解答さんの「から。」につながるように文中の言葉ができるだけ使って、三十五字以上四十字以内で説明しなさい。

問五 文中の ☐ Xには同じ言葉が入ります。適当な語句を文中からぬき出して答えなさい。

問六 この物語の表現の特徴を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 語り手が「わたし」や他の登場人物の心情や行動を説明する形式で書かれており、読者がすべての登場人物を把握しやすくなっている。

イ 語り手が「わたし」の心情や行動を説明する形式で書かれており、読者が「わたし」の気持ちを捉えやすくなっている。

ウ 「わたし」の視点から他の登場人物の心情や行動を語る形式で書かれており、読者が「わたし」以外の登場人物の気持ちを捉えやすくなっている。

エ 「わたし」の視点から自分の心情や行動を語る形式で書かれており、読者が「わたし」の気持ちを捉えやすくなっている。

問七 この物語の「わたし」はどのような人物として描かれていますか。次のア～オの中からあてはまるものをすべて選び、その記号を答えなさい。

ア 皆を引っ張って行動する、リーダーシップのある人物。

イ 内気な性格で、人前で話すことが得意ではない人物。

ウ 話し上手で、気になることは積極的に発言する人物。

エ 観察力があり、皆が気が付かないことにも気が付く人物。

オ 一度気になったことは確かめずにはいられない人物。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 各自の負担をキントウにする。
- ② 和室の仕切りとなるシヨウジ。
- ③ リンジ休業のお知らせが揭示けいじされている。
- ④ 新しい生活にナれる。
- ⑤ 食料をキヨウキユウする。

問二 次の①～⑤の――線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 友だちとの約束を果たす。
- ② 政治を刷新する。
- ③ 出発時間が延びる。
- ④ 思いあたる節がある。
- ⑤ 険しい山道を登る。

問三 次の会話文は、ある週の月曜日にA～Dさんたちの四人が、グループ学習の発表の準備について話し合っているところです。この文を読んで、後の1～3の問いに答えなさい。

- A 「そろそろグループ学習の発表の準備をしないと。いつ集まる?」
- B 「私はいつでもいいよ。」
- C 「私は月曜と水曜にピアノがあるから、その日は無理かな。」
- D 「用事があるって明日親せきの家に行くの。それで用事が終わらなければ、木曜日も行かなきゃいけないんだ。」
- A 「今度の土日に家族で旅行に行くけど、それ以外は大丈夫だよ。」

1 現時点で全員が確実に集まることができるのは何曜日ですか。

2 1で答えた曜日以外に、全員が集まれる可能性のあるのは何曜日ですか。

3 2の曜日に全員が集まれるかどうか分かるのは、一番早くて何曜日ですか。

問四 次の①～③の各文の――線部の表現に誤りがなければ解答らんに○を書き、誤りがあればその部分を正しく書き直しなさい。

- ① もし雨が降れば、中止にしよう。
- ② 失敗しても、決してあきらめる。
- ③ 私は算数を父に教えてくれました。

問五 次の①～④のことわざの意味として最も適当なものを後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① のれんに腕押し

- ア 周囲の反対をおし切って、むりやりに行うこと。
- イ なにをしても手ごたえがなく、張り合いがないこと。
- ウ 自分よりも弱い相手に対して、いばりちらすこと。
- エ 長い間働いた従業員に、同じ名前の店を持たせること。

- ② 月とすっぽん

- ア 二つのものの相性が悪く、いっしょには行動できないこと。
- イ 高価なものでも、価値のわからない者の役には立たないこと。
- ウ つまらないものであっても、ないよりはましだということ。
- エ 二つのもののちがいが大きく、くらべようがないこと。

- ③ 転ばぬ先のつえ

- ア わずかな労力で、期待以上の大きな利益を手に入れること。
- イ 心配なことも、実際にやってみると簡単にできるということ。
- ウ 失敗しないうちに、気をつけておくのが大切だということ。
- エ 何回失敗しても、あきらめずに最後までやりとげること。

- ④ 木を見て森を見ず

- ア 細かい部分にこだわり過ぎて、物事の全体を見ていないこと。
- イ 好きな相手のことは、欠点であっても良く見えるということ。
- ウ かかわらなければ、余計な失敗はしなくてすむということ。
- エ 一部を聞いただけで、すべて理解するほどかしこいこと。

国語解答用紙

受 験 番 号

氏 名

問 十五	問 十四	問 十二	問 十一		問 九	問 八	問 五	問 四	問 一
			二つ目	一つ目					
問 十六	30	問 十三					問 六		問 二
		10				10		10	
問 十七							問 七		
							A		
	35						B		
						15		15	
			15	15					
							C		
	40						D		
	から。	20	20	20					

問 五	問 四	問 三	問 二	問 一
①	①	1	①	①
②				
		2	②	②
③	②			
④		3	③	③
	③			
			④	④
			⑤	⑤